

PRAEVIDENTIA DAILY (9月25日)

昨日までの世界：Fed 高官はドル高への懸念を表明するが、市場は無視

昨日は、対円や欧州通貨では米中長期債利回りの上昇を背景にドルが上昇した一方、豪ドル、NZ ドルやカナダドルなど対コモディティ通貨では米株価の上昇等を背景にドルが下落する展開となった。ドル/円は、東京時間には安倍首相が「円安の地方経済や中小企業への影響を注視する」と円安への懸念とも取れる発言をしたことから、一時 108 円台前半へ下落、欧州時間にかけては軟調に推移した。もっとも、NY 時間には米新築住宅販売件数が 50.4 万件と市場予想を大きく上回ったことからドルが反発基調となり、109 円台を回復、底堅さを印象づける展開となった。

この間、Mester クリーブランド連銀総裁は「低金利政策は依然として適切」「ドル高継続は米成長率に影響」と述べたほか、ハト派として知られる Evans シカゴ連銀総裁も「時期尚早に利上げするリスクが甚大であることから、利上げするまでに異例なほどに忍耐強くなければならない」「ドルが上昇すればインフレ圧力が低下する」と述べるなど、総じてハト派的な発言で、特にドル高が利上げ遅延に繋がる可能性すら示唆するものであったが、市場の反応は殆どなかった。

その他、ユーロはドイツ Ifo 景況感指数が 104.7 と前月および市場予想を下回ったことも、ドル高と相俟ってユーロ/ドルの下落に繋がった。他方、NZ ドルは、同国の乳製品大手フォンテラ社が、2014-15 年度について自国農家に対する乳製品買取価格を大きく引き下げたことから、一時的に下落する局面がみられたが、米株高からくる押し上げ効果の方が大きかったようだ。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米日2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WII	原油Brent
ドル/円	+0.1	+0.05	+0.05	-0.00	+0.05	+0.03	-0.01	+0.8	-0.2	+2.2	+0.2
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	-0.5	-0.06	-0.01	+0.05	-0.03	-0.00	+0.03	+0.8	+0.8	+0.2	-0.04
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	-0.3	-0.04	+0.01	+0.05	-0.04	-0.01	+0.03	+0.5	+0.8		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
豪ドル/米ドル	+0.5	-0.02	+0.03	+0.05	+0.00	+0.03	+0.03	+0.8	+1.5	+0.9	
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
NZドル/米ドル	+0.3	-0.01	+0.03	+0.05	-0.05	-0.02	+0.03	+0.8	+1.5	+0.9	
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	米株価	原油WTI	CRB	
米ドル/加ドル	-0.2	+0.02	+0.05	+0.02	+0.00	+0.03	+0.03	+0.8	+2.2	+0.9	

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。  
 (出所) トムソン・ロイター、プレビデンティア・ストラテジー

きょうの高慢な偏見：ドル/円は高水準でレンジ入り？

きょうの注目通貨：USD/JPY ↓

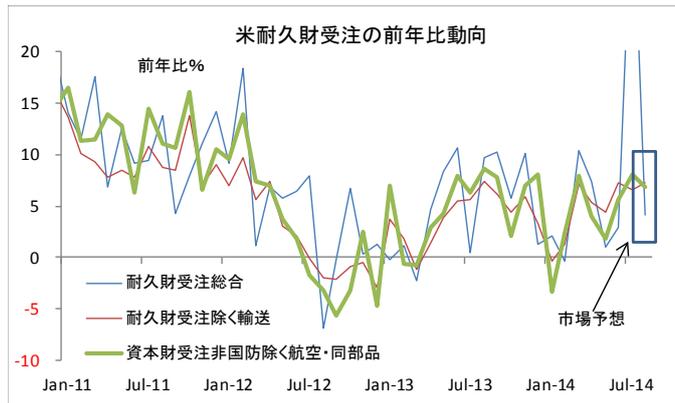
きょうの指標、イベント	時刻	前期	市場予想	備考
米 8 月耐久財受注・前月比	21 : 30	+22.6%	-18.0%	
同・除く輸送用機器		-0.8%	+0.7%	
同：資本財受注・非国防除く航空機		-0.5%	+0.5%	
米新規失業保険申請件数	21 : 30	28.0 万件	30.0 万件	
Lockhart アトランタ連銀総裁発言	2 : 20			ややハト派、投票権なし

(出所) トムソン・ロイター等を基にプレビデンティア・ストラテジー作成

本日も材料が少ない中、Fed 高官発言に注目したい。Lockhart アトランタ連銀総裁は投票権がないが、8 月のジ

ヤクソンホール・シンポジウムで来年半ばの利上げ開始を唱えており、この1か月で彼個人のそうした見方が変化したのか、その場合の背景は何か、またFOMC全体としてのスタンスが本当にタカ派化したのかについてどのような発言をするかが注目される。前回通りのややハト派的な内容であれば、ドルの調整に繋がる可能性が高く、急落には繋がらないが108円半ば方向へのドルじり安要因となるだろう。

なお、米経済指標では耐久財受注が発表され、総合計数は月次の振れが非常に大きい統計で短期的な金融政策判断上重要とは思われず、従って為替その他金融市場に大きな影響力は持たないが、設備投資の先行指標とされるコア資本財受注（非国防除く航空機）は市場予想通りであれば前年比でも5%超の比較的堅調な伸びが維持され（下図を参照）、米経済の回復基調の継続を示すものとなる。また、新規失業保険申請件数は前月28.0万人へ大きく減少した後、反発が予想されているが、市場予想を下回ると労働市場の改善が意識されドル下支え要因となる。行き過ぎたFedのタカ派化の織り込みの後退と、米経済指標の改善傾向に挟まれ、ドル/円はひよっとすると目先108.00～109.50円程度のレンジに入った可能性もある。



#### ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいますようお願い申し上げます。  
当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。  
当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。

プレビデンティア・ストラテジー株式会社  
金融商品取引業者（投資助言・代理業）関東財務局長（金商）第2733号  
一般社団法人 日本投資顧問業協会 会員番号 012-02641